

2020年9月27日 礼拝説教要旨

詩編講解説教32「赦される幸い」

詩編32：1～5、ルカ23：32～34

詩編第32編9節は、文語訳では「汝らわきまえなき馬のごとく、兎馬のごとくなるなかれ」となります。「兎馬」というのはウサギのように飛び跳ねる馬のことではありません。ロバのことです。ロバは耳がウサギのように長いことからそのように呼ばれているそうです。ロバは一見おとなしく穏やかそうに見えますが、詩編第32編では必ずしも良いイメージで登場していません。「分別のない馬やらばのようにふるまうな」（9節）と言われます。ロバの性格は気まぐれで頑固と言われています。

そういう話を聞きますと、やはり自分自身のことを重ね合わせて考えます。わたしたちも頑固で強情なところがあります。自分の考えを曲げない、人の話を聞かない。それは何より神さまに対してそうであります。礼拝の中で牧師が会衆を代表して祈りますが、そこでいつも祈ることは一週間に重ね続けてきた罪の告白であり、懺悔の祈りです。たくさんの恵みをいただきながらも感謝に乏しい生活でした。感謝どころか、不平や不満を並べ立てるような日々です。また素直に過ちを認めるのではなく、頑なに自分の主張を貫こうとする。自分を正当化し責任転嫁する。それが人を傷つけ、悲しませている。そしてそのことに気づいていない。そういうわたしたちの罪の現実があります。

「いかに幸いなことでしょうか。背きを赦され、罪を覆っていただいた者は。いかに幸いなことでしょうか。主に咎を数えられず、心に欺きのない人は」（1～2節）ここには「背き」「罪」「咎」と三つの言葉があります。これは原文を見てもやはり三つの言葉が使われています。「背き」（ペシャア）はまさに神さまに反抗すること、反逆、背くことです。「罪」（ハッタート）は道からそれることですが、神さまの教えから迷い出て、逸脱することです。「咎」（アオーン）は不正、不義ということですが、罪の結果、墮落し不正に走ることです。社会的な罪と理解してもよいでしょう。一口に罪といってもそこには様々な様相があり、罪の根がいかに深く、複雑で、それこそ一筋縄にはいかない、厄介なものであるかが、この三つの言葉から見えてきます。

わたしたちは、罪というものを軽く考えていることがあります。ともするとわたしたちの気持ちの持ちようによってどうにかなると考えることもあります。例えば、犯罪を犯した人を更生させる取り組みがあります。最近でしたかテレビで熊本刑務所のことが取り上げられていました。60年以上服役した人が高齢で仮釈放されて施設に入るという内容でした。その番組を見た限りでは、その人は60年以上服役したわけですが、自分の犯した罪を心から悔いているようには見えませんでした。もちろん個人の感じ方ですが、いろいろと考えさせられた番組でした。罪を償うために刑務所に入っても、それで本当に罪を償うことになるのだろうか。60年刑務所に入っても消えない何かが残るのです。

この三つの言葉は、それぞれ「背き」は赦す、「罪」は覆う、「咎」は数えるという動詞が付きますが、そのいずれも神さまが主体、主語になっており、人間は全くの受け身です。つまり罪は、人間が主体になって解決できる問題ではないということです。神さまが赦し、覆い、数えないことでしか解決できない問題なのです。それゆえ、神さまは独り子イエス・キリストをお与えになるという仕方で罪を解決されました。わたしたちが自分で償うのではありません。神

さまがわたしたちに代わってその償いをしてくださった。それは一方的な赦しの恵みであって、わたしたちはただそれを受け取るだけでいいのです。それは都合がいいと思われるかもしれない。でも罪に対して人間は全く無力ですから、そうするしかありません。溺れている人は自分を助けることはできません。溺れていない誰かが助けてあげなければならない。罪に溺れていないのは神さまただお一人だけなのです。罪の解決の道はそこにしかありません。

さらに罪の赦しを考える時、『ハイデルベルク信仰問答』はとてもよい示唆を与えます。

問56「罪の赦し」についてあなたは何を信じていますか。

答 神が、キリストの償いのゆえに、わたしのすべての罪と、さらにわたしが生涯戦わなければならない罪深い性質をも、もはや覚えようとはなさらず、それどころか、恵みにより、キリストの義をわたしに与えて、わたしがもはや決して、裁きにあうことのないようにしてくださる、ということです。

注目していただきたいのは「もはや覚えようとはなさらず」というところです。これは忘れてくださる、思い出さないということです。今日の詩編でも「主に咎を数えられず」（2節）とありました。これも「覚えない」ということです。なかったこと、終わったことにしてください。それは表向きにそういうふりをするということではない。すべて忘れておしまいになる。ここに神さまの赦しの完全さがあります。

わたしたちはそうはいきません。赦そうと思っても忘れることができず悩むのです。よく水に流すと言います。でも完全に水に流せるでしょうか。水に流せたと思っても、そのことを思い出しては怒りをよみがえらせる。いつまでも根に持つ。そういうことがないでしょうか。あるドイツの牧師は、説教の中で「忘れることができないのは人間が過去に対して力がないからだ」と言います。だから過去に捕らわれてしまう。思い出しては怒り、いつまでも赦すことができずにいるのです。けれども神さまの赦しは完全なのです。過去も現在も将来も貫いて赦される。このような完全な赦しが他にあるでしょうか。

それは罪を赦された者にとっては、本当に救いであり、幸いです。神さまは忘れてくださるのですから。だから新しくやり直せるのです。一週間はその繰り返しでしょう。たとえ罪を悔いて落ち込んでいても、ため息をつき、肩を落としながら礼拝に来ても、今日またわたしたちは新しく御前に立つのです。そして赦された者として再出発するのです。そこに真に赦される幸いがあります。